

「斬られる仙太」の命運

— テキスト・レジの問題 —

高橋 新太郎

芝居への執念を燃焼し尽したかのように、宇野重吉が逝った。

二月に、劇団創立四十五周年記念・三好十郎没後三十周年記念と銘打った文化座の「斬られる仙太」がサンシャイン劇場で公演された。初演は「左翼劇場」から改称した劇団「中央劇場」の第一回公演で、一九三四年五月、佐々木孝丸演出によるものであった。一九六八年八月に「民芸」が宇野重吉演出により東横劇場で上演したが、第四場と最後の第十場をカットしたもので、これについては、本多秋五・猪野謙二・菅孝行・茨木憲・小笠原克・高山國南雄その他の論議があった。

劇的效果を理由に、第十場を不要として、同志の士の大義を名とする政治的思惑から、百姓上りで博徒として腕を磨いた仙太が利用されつくした挙句、短筒で撃たれ滅多斬りにされて谷底に消えてゆく第九場で結んだ、演出者宇野重吉のテキスト・レジを可とするものと、第十場にこそ劇作家三好十郎の思想の真骨頂を見る論者とに分かれた。第十場の「裏壁在水田」は、

元治元年の天狗党筑波拳兵から二十年後の、明治十七年八月末に時代が設定されている。奇跡的に生き延び、帰農して地の虫になった仙太は「何のことも上立ってワアワア言ってやる人間は当てにゃならねえものよ。多数の中にゃ欲得離れてやる立派な人も一人や二人はあるかも知れねえが、そんな人でさえも頭ん中の理屈だけできとをやっているもんだから、ドタン場になれば、食うや食わずでやっている下々の人間のことゝ忘れてしまふのがオチだ。」と言ひ、己れの生活の原点たる稲田を踏み冒そうとする者を、それが自由党の壮士であれ、それを遠う刑事であれ、身を賭して排除する。

初演当時、村山知義の農民と革命的インテリゲンチヤとを離間することを結果する、あるいは久保菜の天狗騒動と自由党左派との実践的意義を混同するような反動的歴史観といった、左翼の公式主義的内部批判もあった所以である。執筆時の三好十郎には、どんな急進的なイデオロギーで武装している人間でも、人間一般を決定する生活・経済関係等の条件の外に立って

はいないというつよい思念があった。生活意識を基礎に据えな
い政治意識、ひいては運動への不信であった。「民芸」の宇野
演出にも、六十年代の微妙な時代の翳が影を落としている。

宇野のテキスト・レジについては、六戸恭一のつよい批判が
あり、『未来』誌上（一九六八・十二）六九・二）でのやや不規
則なやりとりの中で、「ひいきの引き倒し」だとする宇野の感
情的な反論もあったが、本筋のところでは議論が噛み合うことな
く終ってしまった。宇野が存命で元氣であれば、秋浜悟史演出
によるノーカットの今回の文化座上演を機に議論が深められ
たかもしれない。

「どっちせよ、ふところ手をして食って行ける人間のするこ
とはそんなもんよ。当てにはならねえ。トコトンの一番しめえ
に、人をぶっ倒しても、こんだ他人からぶっ倒されねえ者と言
えば、百姓、人足、職人、穢多、非人などのホントの文無し
の者だ。しかし、そいつは、まだだあ。」と仙太はいう。

斬られ果てた仙太ならぬ「斬られの仙太」として喧伝され、
生きながらえて到り着いた透徹した心境、認識こそが、戦後に
及ぶ三好戯曲史の総体に整合するこの劇の核心にほかならぬと
いうのが、目下の私の理解である。

今回の秋浜演出は、シヨウ的部分のフォルムに現代的趣向を
盛り込むことに成果があったが、反面、動から静への転調の間
の拡がりや充分ではなかったように思う。

三好十郎は「戯曲の運動」として新劇を位置づけスター中心
・プロデューサー中心の新劇の流れにあらがい、こだわり続け

た。

初演以来の「斬られの仙太」の命運は戯曲作家三好十郎の命
運でもある。

五月十六日から二十一日まで、早稲田大学大隈記念堂で、
「三好十郎展」が開かれる。日本演劇学会主催のシンポジウム
も企画されていると聞く。三好十郎の作品世界とその思想的遺
産を再評価する機運も高まりつつある。三好十郎の全体像にも
っともっと光りが当てられてよい。